寄稿文

いつまでも
スキーを楽しみたい

土屋 彰男

はじめに

スキーを始めて50年余。旧知の岩尾さんと久しぶりにお会いし、スキーの話をしたところこのような機会を与えてくださりました。気楽な高齢スキーヤーとして日頃思っていることや今後のスキー場に期待することを書いてみました。お読みくだされば幸いです。

スキー歴

まずは、自己紹介。
これまで行ったスキー場は、長野県、上越、東北南部を中心に60か所ほど。数え方が難しいですが、例えば志賀高原は1か所と数えてです。閉鎖されてしまったスキー場も数か所あり、寂しいです。
腕は、万年中級。急斜面は苦手。こぶ斜面、深い新雪斜面は滑れないので滑りません。
道具は、20年近く前からカービングスキーですが、滑り方が従来型からカービング型になったのはここ10年ほどです。
ヘルメットは、ミハエル・シューマッハさんの事故のニュースを聞いてすぐに買い、いつも被っています。

長野県の生まれで、高校卒業後は、6年間を除き、東京圏住まいです。
初めてスキーをしたのは、1967年。中学2年のときに学校のスキー教室で志賀高原でした。スキーの上手な先生がいて、手引書を自ら作り、見事なくの字型のアンギュレーションの本人写真が今でも目に浮かびます。

東京に出てからのスキーは、60歳になるくらいまで、ほぼ毎年1~3回行っていました。中でも思い出深いのは、昭和の末から4年間住んだ福島です。朝の天気を見て、今日はスキーだと、国道13号に接して位置する栗子スキー場に行ったものです。あと、こどもが小さかった頃は、直滑降でも止まれる富士見高原スキー場とか川場スキー場によく行きました。
60歳になったとき、やはり1度は北海道でと、ルスツ、ニセコ、富良野と3年間にわたり行きました。気温が低いのにびっくり。雪質がずっとパウダーでうまくなった感じを満喫しました。時間的に余裕ができたこともあり、日帰り土日主体から平日宿泊型に転換し、回数も数回と増え、一方、車で一人で行くことがほとんどとなりました。

「昔スキーをしたけれど今は･･･」という方に

ある程度の年以上の方とスキーの話をすると、このように仰る方がほとんどです。
私自身なぜ続けているのか考えてみると、すばらしい景色、スピード感というプラスの面は変わらず、過去に比べてマイナスの面が減ったことが大きいと思われます。

- ✔ **空いている**
  延々と続くリフト待ちの列、混雑したゲレンデ、駐車場に入れないは、過去のこと。
- ✔ **ゴンドラ、高速リフトが主体になった。**
  輸送力が大きく、待ち時間が短縮。速度向上により乗車時間が短縮。
- ✔ **寒くなくなった。**
  ウェア、手袋の進化。リフトに乗っている時間が短くなり、体温低下が少ない。
- ✔ **回転が簡単になった**
  細長い長方形の板に乗って、坂をまっすぐ下るのではなく、曲がりながら降りる。どうやって曲がるのか。考えてみてもわかりません。うまい人が滑るのを見ればきれいに曲がって行きますが、簡単にまねできません。パラレルまでの道は遠かった。

そこで登場したのがカービングスキー。板の中ほどがくびれています。スノーボードのスキー版です。ということは、板を左右に倒せば、倒した方向に板が弧を描いて曲がって行きます。簡単です。どなたもほどなくパラレル到達という代物です。加えて、回転に横滑りを使わないので、回転に伴う速度の低下が少なく、緩斜面でもそれなりの速さでに滑ることができます。さらに、スキーが短くなり、材質の進化もあって、軽くなっています。

プラスの面といえるかどうかですが、体力との関係です。他の多くのスポーツと決定的に違うのは、移動するエネルギーの源がリフトによってもたらされる位置のエネルギーにあることです。自然に下っていくスキーに乗って、それをコントロールするだけですので、年齢により低下していく体力でも、急斜面などを選ばなければ、十分対応していけます。
よって、むしろ高齢者にもふさわしいスポーツだと思います。

好きなスキー場
嫌いなスキー場

好きなスキー場の特徴は、次です。

- ✔ **スキー場の立地がよい。**
  自宅から近い。高速道路のICから近い。幹線道路から近い。
- ✔ **ゲレンデの立地がよい。**
  幅が広く、平坦。斜度が均一で、長さが長い。
- ✔ **雪質がよい。**
  標高が高い。氷点下の気温が続く期間が長い。
- ✔ **ゴンドラ、フード付き高速リフト、高速リフトが完備し、ちゃんと動いている。**
- ✔ **早朝の圧雪に加え、雪が降り続くときは昼間の圧雪も行う。**

苦手なスキー場は、次の一点に尽きます。

- ✔ **高速リフト・ゴンドラ待ちの列が長くなっているにもかかわらず、係員が定員乗車に向けスキーヤーに声をかけず、1人乗りとか2人乗りを放置しているスキー場。**
  このことを不快に思っている人は相当いらっしゃると思います。自分では、自分の番がきた時に前に空きがあればそれに乗り込むことくらいしかできません。

係員は、定員乗車に向けスキーヤーに声をかけるようにと指導されていなければ、声掛けしてスキーヤーから文句を言われたくない、トラブルに巻き込まれたら大変だと、自発的に声がけすることを期待することは無理がありそうです。
最近では平日に滑ることが多いのでこのような場面に会うことは少なくなったのですが、たまに遭遇すると、現場責任者は現場を見ているのか、係員を指導しているのか、そんな現場責任者を任命している経営者はいったいどんな人なのか、と大いにストレスをためている次第です。
是非改善してほしいです。教育指導を高める、給料を上げてよい人材を得るという方法のほか、たまに見かける、おひとり様用レーンを設けるというのも効果があると思います。

料金について思うこと

シニア料金の恩恵を受けています。さらに、70歳以上はもっと安いというところもあり、ありがたいと感じています。とはいえ、今の経営を考えるなら高齢者優遇でしょうが、将来の経営を考えるならこども優遇をさらに進めることが大事と思います。
スキー場事業は装置産業ですので、長期を見据えていろいろな方策を試してみることができそうです。
こどもを考えたとき、こどもはどんどん大きくなるので道具はレンタルとすることが多いと思われます。経営主体がスキー場ではないレンタルショップも多いと思いますが、取り組んでほしい。

また、近ごろICカードでリフトに乗れるスキー場が増えています。ICカードのシステムを使えば、利用者のニーズに合うとともに、収入総額もふえるようなきめ細かい料金体系ができるのではないかと感じています。
すでにいろいろと取り組んでいるスキー場があると思いますが、知らないので、こんなのあったらいいな、というのを書いてみます。

たとえば、最初に一定額チャージし、リフト、ゴンドラに乗った都度、その料金分を差し引く。ただし、回数が増えるごとに料金が下がっていくようにし、最大でも1日券と同じ程度になるようにする。余った額は、払い戻す、シーズン内使える、お得なお買物券になるなど。というお得券を設ける。
メリットは、高齢者、初心者がどの券がお得かと迷わなくてよい。加えて、収入がリフトに搭乗した人数と結びつくので、先に記した定員乗車に向けての取り組みへのインセンティブになる。1日券､半日券を売ってしまったら長い待ちのためリフトに乗れる回数が少なくなろうが関係ないという姿勢は、経営採算上も許されなくなりそうと期待。
デメリットは、当面の総収入が減ってしまうかどうかです。

ゲレンデの上級、中級、初級

ゲレンデには、必ず、上級、中級、初級の別が色分けされて表示してあります。加えて、各ゲレンデについて、最大斜度、平均斜度、長さの表がついていることもあります。
実際に行ってみると、とまどうことが結構あります。これが上級？、楽すぎというところ、これでも初級？、こんな斜面滑れるの、と感じるところもあります。
というようなこともあり、初めてのスキー場に行くときは、ネット上の評判、口コミを調べてから行くことにしています。こんな情報があったらと思うのは、ゲレンデ斜度マップです。標高によって色分けされている地形図のように、斜度によってたとえば〇度〜〇度は〇色というように塗り分けられたものです。

気になるのは最大斜度ですから、これがあれば一目瞭然です。

あと、名前です。上級、中級、初級をやめて、急、中、緩にしたらよいのではと思っています。かってもっぱら上級コースで滑っていた人も年を取ってきたら中級、初級コースで滑ることがよいと思うのですが、この俺が初級コースを滑れるかと、プライドが許さないことをもってスキーから遠ざかっている人が少なからずいらっしゃるのではないかと。

最後に

今後のスキー場に期待するのは、平日もにぎわうスキー場となってほしいということです。というのは、平日は空いていてとても快適なのですが、一方、稼働リフト、圧雪の間引きがあり、滑れるゲレンデが少ないというマイナスがあります。コロナ禍も収束し、インバウンドが戻ってくるという要素がありますが、地域の宿泊施設と組んで時間に余裕のある高齢者を呼び込み、にぎわいの中でスキーを続けていけることを願っています。
とりとめのない拙文を最後までお読みくださり、ありがとうございました。

土屋 彰男　／　TSUCHIYA Akio

1952年長野県生まれ。
1975年東京大学法学部卒業、同年、建設省入省。
運輸省、福島県庁、国土庁等を経て、国土交通省河川局次長で2005年退官。